リレーコラム 34　　キャリアの積み方－私の場合

The best doctor in the world is the pediatrician?

葛飾赤十字産院小児科　　**来住　修**

The best doctor in the world is the veterinarian. He can't ask his patients what is the matter –he's got to just know. – Will Rogers

この文章はとある学生室に貼ってあったものです。当時私は農学部獣医学科の学生でした。動物行動学教室に所属し、主にシバヤギストレス反応を神経内分泌学的に解析するグループで卒論に取り組んでいました。

研究室の当時助教授であった故森裕司先生のお話で、よく覚えているのは「研究でもっとも重要なのは仮説をしっかり立てることです。そのためには、すでに知られている報告をしっかり調べて仮説をたてましょう。」という基本的な心構えについてのものでした。

獣医学科卒業後、博士課程には進まず、製薬会社で動物実験を行っていました。そこで基礎研究に携わる過程で、臨床に興味を持つようになり、神戸大学の医学部に再入学しました。医学部時代は、学業とアルバイト、そして長女の誕生もあり、あっという間に過ぎました。

初期研修が終了し、小児科を選ぶにあたって、冒頭の英文は潜在的に後押しとなった気がします。「Veterinarian」(獣医)を「pediatrician」に換えても立派に成り立つからです。後期研修は東京医科歯科大学の医局に大変お世話になり、関連病院で様々な症例を経験させていただきました。現在は医局を離れ、東京都の地域周産期センターの1つである葛飾赤十字産院のNICUの病棟業務に従事しています。Neonatologistを目指すことはよりveterinarianに近づいているようにも思うのですが、しゃべることのできない新生児を相手に訴えを感じる毎日に充実感があります。また、後期研修でお世話になった墨東病院新生児科での貴重な経験も今に繋がっていると思っています。NICUはマニュアルだよりになりがちです。数学の公式と証明ではありませんが、マニュアルの背景根拠を理解する事の方が大事であることを教わりました。

獣医時代の経験と関連して、日々の診療で心掛けていることは、症例をしっかり観察することと、病態を仮説ととらえしっかり検証する事です。動物の行動観察で鍛えた観察眼と、森先生の話を役立てたいからです。知識、偏見が判断に悪影響を及ぼすことが多々ありますので、純粋に症例をとらえ、仮説のような病態をうちたて、必要に応じて修正、検証し、患者さんに役立てたいと思っています。

昨年、当直中に倒れてしまい健康について見直しております。現在48歳で、老眼、白髪の進行はとまりません。断食、減酒、運動、腸活等とりくむ試行錯誤の毎日です。

＜著者略歴＞　来住　修　　きずみ　おさむ

1972 年 神戸市垂水区で出生後、父の転勤で横浜に転居

1991 年 神奈川県立光陵高校卒業、同年東京大学理科 2 類入学

1997 年 同大学農学部獣医学科卒業、同年より製薬会社勤務

2006 年　神戸大学医学部医学科卒業、千葉県流山市の東葛病院で初期研修

2008 年～　東京医科歯科大学小児科にて後期研修、小児科専門医取得

2016 年～　葛飾赤十字産院小児科勤務

現在に至る

～男女共同参画推進委員会より～

「ダイバーシティ」とは、性別、人種、年齢、学歴、価値観にとらわれることなく広く人材を活用し、発展性や生産性を高めようという、マネジメントで近年よく使われる言葉です。医師になる前にキャリアを持っておられた方が、その豊かな経験を医療に活かし、単一性や閉鎖性の中にある常識を覆すといったように、多様性がもたらす効果は計り知れません。一方で、2018年に複数大学の医学部入試において、性別や年齢による差別が行われてきたことが発覚した事件も記憶に新しく、その後の文部科学省調査の最終報告において、入試採点の際に性別、年齢、出身居住地をマスキングして採点の公正性を担保している大学は半数以下であるという事実もあります。男女共同参画推進委員会では、医師・患者両方のダイバーシティを大事に扱うことの重要性を発信して行きたいと思います。